

有限会社 アクティブ^{フォー}4

■ 時代の変化に対応できる経営を追求



〈法人の概要〉

所在地: 〒061-0505 月形町札比内 1006 番地

代表者: 代表取締役社長 上葛(かみくず)幸男

構成員: 4 名(構成農家 4 戸)

役員: 4 名 常時雇用者: 3 名

設立: 平成 18 年 4 月 資本金: 500 万円

事業内容: 畑作(転作) / 農作業受託

秋まき小麦 32ha、春まき小麦 14ha、大豆 25ha、
水稲 10ha、馬鈴しょ.5ha(H22 年)

経営面積: 86ha

農作業受託面積: 大豆、小麦の乾燥調製 12ha

売上高: 6,100 万円(H21 年) 交付金も含む

電話: 0126-54-3177

〈法人のあゆみ〉

平成 18 年	有限会社アクティブ4を設立 構成員 4 名、従業員 2 名(構成員の子弟 U ターン)、経営面積 78ha でスタート
19 年	馬鈴しょを導入
21 年	農地 10ha 購入
22 年	従業員 1 名採用(構成員の子弟 U ターン) 現在、構成員 4 名、従業員 3 名(後継者 U ターン)、経営面積 86ha

〈設立の経緯・設立後の状況〉

- ・代表は平成 15 年頃から農業所得向上や地域農業維持のための対策を模索していた。
- ・平成 17 年ころ、国の水田農業施策に対応して、農業経営を維持するための今後の方策を地域の 4 人の仲間と話し合った。
- ・農協、農業改良普及センターに、法人化のメリット・デメリット、手続き、経営計画、技術などを相談し、機械・土地の引継、負債の返済、報酬などを検討した。
- ・法人設立がきまってから、構成員の子弟に U ターンを打診したところ 2 名が就農し、構成員 4 名とともに法人に従事することとなり、経営面積 78ha で平成 18 年 4 月に有限会社アクティブ4を設立した。
- ・平成 19 年に当法人の作業体系において労働競合する果菜類をやめ、馬鈴しょを導入。21 年に農地を 10ha 購入。また、春まき小麦に初冬まき栽培技術、大豆に汎用収穫機の利用技術を導入していった。
- ・平成 22 年には、構成員の子弟 1 名(U ターン)を従業員として採用し、従事者は構成員 4 名と後継者 3 名となり、経営面積 86ha に拡大し、秋まき小麦 32ha、春まき小麦 14ha、大豆 25ha、水稲 10ha、馬鈴しょ.5ha を作付している。
- ・構成員の子弟はいずれも U ターン者であり、会社勤務を経験しているのでスムーズに対応できており、また、色々な企画やアイデアを提案。
- ・月形町では、平成 19 年から 22 年までに複数戸による法人が、5 法人設立されている。

〈法人経営で生じた課題と対応策〉

- ・大きな問題は生じなかった。
- ・果菜類は、当法人の作業体系において労働競合するため作付をやめ、馬鈴しょを導入。
- ・助成制度の変更により収入は大きく変動するため、その年の収支計画から報酬を調整。

〈法人経営のメリット・デメリット〉

- ・やらなければならないことがタイムリーにできる。
- ・お互いの目があるので手抜きしづらく、それが収量アップ等の結果につながっている。
- ・組織として動けるので、冠婚葬祭があっても支障をきたさない。
- ・適期作業が機械装備や人員がいるからできる。
- ・コスト(特に機械費)を抑えることができる。

〈法人が継続するためのポイント〉

- ・設備投資は補助事業を上手く活用する。
- ・政策は次々変わることが想定されるが、それを受け入れてどうしていくかを考える組織の力をもっているべきである。会社をどう存続していくかを常に考える。

〈これから法人化を目指す農業者へのメッセージ〉

- ・目的を明確にし、そのために十分話し合う。導入作物等確実に収入になるかを確認すること。
- ・法人化したら一時的なメリットは見えるかもしれないが、中長期計画をしっかり立てる。

〈特徴的な活動や取り組み〉

- ・転作田を利用した畑作物中心の経営。
- ・最新の小麦や大豆の栽培技術を習得するため勉強会を実施している。
- ・後継者は、農外での勤務を経験しているので法人運営にはスムーズに対応できている。

〈経営目標と将来の展望〉

- ・米作を基本に、コスト 7~8 割で栽培できる規模、技術をもち他県と競争できる米づくりをする。
- ・堅実経営が最優先。畑作物の作付は必須なのでそのための勉強をし、作るプロになる。

〈視察等の受入〉

詳細については要相談。

連絡先: 0126-54-3177 (担当:代表取締役 上葛幸男)